

さよなら平塚、そして、みらいへ

林 悦 子

2年越しのコロナ禍がなかなか収束しない中で退職時期を迎えました。専任最後の2年間、対面授業は適わず、ほぼオンラインによる遠隔授業となりました。教育現場に長年親しんできた者として隔靴搔痒の感は拭えません。その一方で、私のような昭和生まれの典型的なアナログ人間にも、確実にデジタル・トランスフォーメーション（DX）の波は押し寄せ、気がつけば、年寄りになっても結構デジタル化の恩恵は得られるのだな、との実感を新たにしている今日この頃ではあります。眼精疲労は否めませんが……。

本来であるならば、立派な論文を上梓して研究生活の総括とするのが理想の形であることは重々承知いたしております。しかしながら、私の場合、かのポーヴォワールが『老人論』において先人の名言を引用しつつ喝破するところの「60歳を過ぎて書くものは、凡そ若い頃の作品の二番煎じに過ぎない」と手厳しく批判される域を免れません。

それゆえに、関心を持たれる各位におかれましては、上記に関連する評論として、林(2019)「高齢者雇用と人的資源管理 — デジタル世代との協働と相剋」『神奈川大学評論』第92号をご高覧いただくことをお願いし、ここでは、湘南ひらつかキャンパスへのオマージュを込めた思い出話をするをお赦しただきたく存じます。

あれは確か、1997年の11月のことだったと記憶しています。首都圏への転職を希望し

ていた私の許に、ありがたいことに神奈川大学経営学部から2次試験の面接の通知が届きました。というのも、その頃勤務していた札幌は、食べるものは美味しく、人の情けも温かく、大学の仲間もいい人たちばかりで殊更に不満はなかったのですが、とにかく冬が寒い！年間250日はピーカンに晴れるという、南半球はオーストラリア・シドニーでの周回遅れの大学院生活5年を経ての直後であります。このカルチャーショックならぬクライメットチェンジは痛かった。

北海道の冬は地吹雪。ああいうのをホワイトアウトというのでしょうか、トルネード状に雪が舞うので10メートル先が真っ白で見えません。札幌が190万人都市でなければ、まさしく雪女の登場シーンです。「ねえ、こんな日は大学休校でしょ？」「先生、それじゃ半年休校です」。当時の学生との会話です。

こんな調子ですから、12月の札幌大通公園ホワイトイルミネーションの頃から翌年5月の連休明けまで、道路が凍りつくので迂闊に外に出られません。綿毛のような雪虫が舞う季節になると街中の道路に氷が張るので、マンションを一步出た途端、特設スケートリンクよろしくスッテンコロリン。ある時、交差点の真ん中で転び、焦って立ち上がろうとすると、また転び……。迫り来るヘッドライトに命の危険すら感じました。この先を考えると、これではいくら命があっても足りません。さすがにその時は、頭にヘルメット、両手にストックで大学に通おうかな、と真剣に

考えました。学生には笑われましたが。

閑話休題。さて、面接試験前に会場の下見をしておいた方がよからうと、平塚キャンパスへ予行演習にやってきました。札幌の自宅から当時の両親の住まいのあった新宿までおよそ3時間半。その新宿から旧平塚キャンパスまで東海道線経由でJR平塚駅まで2時間弱かかったと記憶しています。北海道から東京までとあまり変わらないなあ……。

はたして、そこからが問題でした。神奈川大学という行き先を確認して乗ったはずのバスが、里山とおぼしき狭い道路に差し掛かると、「山入り口でございます。お知らせがなければ通過します」……「つぎは、山の神、山の神でございます……」。11月の午後、日の暮れが近い時刻、乗客が途中で全くいなくなってしまったバスに一人取り残されて、この先はたして人家があるのだろうか、キツネやタヌキが出やしないかと真剣に悩み始めた頃、「つぎは、終点神奈川大学……」というアナウンス。ぼんやりと立派な門構えが見えてきた時には、これは幻ではないのだ、どうやら大学のキャンパスはこの先に存在するらしい……。ただし、建物らしきものは守衛さんの詰所ぐらいで、当時はバスが構内に入ってこなかったのではなおさら不安に駆られたのを覚えています。

まぐれか否か、無事面接が通って最初の教授会でのご挨拶。「北海道から参りましたが、出身は東京です。その前の5年間はオーストラリアで過ごしました。したがって、南方ボケした頭を札幌で一旦急速冷凍し、またここ湘南の地でじわじわと自然解凍しようと思っています。そのような次第で、どうかよろしくお見知りおきのほど、お願いいたします」。すると、当時の教授会メンバーには「隠れ北海道ファン」の方が実は大勢いて、「なんであんないい土地から移ってくるんですか。きっと後悔しますよ」。

随分と失礼な物言いですが、みなさん若い頃のよき思い出を心に抱いて現実世界を生きていらっしゃるらしく、私のように冬が寒いから嫌だ、などという手合いは許せなかったのだと思います。実際、一回限りではありましたが、「平塚キャンパス北海道の集い」というイベントが開催されました。ただし、実際の出身者は大樹町（たいきちょう）の海老澤先生くらいで、あとの面々は高校時代を過ごしたとか（松浦先生）、大学院時代の温かい思い出がぎっしり（小澤先生）などなど、いわば「袖擦り合うも……」組です。ただ、理学部の先生方も結構いらして（力石先生など）、北海道民郷土愛の強さを思い知りました。しかし、みなさんの共通項は、若い頃の楽しい思い出と不可分に結びついているということに変わりはありません。しっぽを巻いて退散してきた身には、負け惜しみのような感じが。

ところで、当時の平塚キャンパス経営学部を称して、「鶴（ぬえ）のような学部だ」と評される方がおられました。いったい何が専門なのかわからない。確かに経営学部らしき科目はあるけれど、語学をはじめとして国際政治・経済・文化に関連した科目、情報系、体育系の科目、芸術系……。よく言えば多士済々、悪くすると、そう、それが正体不明の鶴みみたいな、ということなのでしょう。

後になって、経済学部在建学以来の金看板、貿易学科（現・現代ビジネス学科）があるのになぜそんなものを作ったのか、平塚の山の中のキャンパスじゃあ、そう長くは保たないだろうよ、などという声があるのを耳にしました。豈図らんや、それが30年余も命脈を保つことになるとは、誰しも不思議に思うのかもしれない。

安易に答えは出せませんが、私は教育にかける思いの強さがそれぞれの教員にあったからだと思っています。そういえば、当時の先生方は、熱かった。なかには「平塚キャンパ

ス独立構想」などというのもまことしやかに語られて、(来た早々それだけはやめてほしいな……だって明らかに採算取れないもの……、と) ちょっと真剣に悩んだことを思い出しました。ことほど然様に、当時の先生方は熱いというか、濃いというか、今の言葉でいえば、かなり「クセ強め」の方が多くおられたように思います。

ここでことさらに美化する必要もないので事実即して申し上げますと、当時の平塚では頻繁にカリキュラム改革が行われ、何かユニークで今までにない目新しい改革につなげることはできないのか、と真剣に考えてこられたように思います。また、当初からの1年生ゼミ「基礎演習」や、1学年500人規模の社会科学系学部において、卒論を必修にするなど(ちょっと外から見れば)考えられない前代未聞の試みなども、とうとう最後までやり遂げてきましたよね。基礎演習などはFYSと名を変えて全学に伝播しました。しかし、最初から最後まで「自前」でやっているのは経営学部くらいだと思います。平塚の郊外という立地もあったのですが、自前主義・手作り主義 — これが奏功して、今に続いているものと思われま

す。その一方で、現場は大変です。教員一人ひとりが結構な時間とエネルギーを取られる中で、学生の顔をしっかり見ながら、これら独自企画に向き合う — まあ、教育の基本が遵守されてきた、その成果だと思います。

もう一つ、自分の担当科目と絡めて学部の強みとしてのユニークな点を確認すると、単なる経営学部ではなく、一学部一学科すなわち経営学部・国際経営学科であったことが、結果として奏功していたように思えます。私は独自の経歴から、専門である「人的資源管理論」の他に、「国際比較経営論」を担当しています。これは、遅ればせの留学経験を反映しての担当科目割り付けだと思われま

す。大学を卒業すると、どの学生もほぼ必ず就

職をするわけで、人的資源管理論では、組織に勤めれば必ずや遭遇する自分の処遇に関する知識について、前もってしかも経営者の立場から考え、働く自分の権利と義務をきちんと理解して社会に出てほしいという思いで講義しています。よく、日本的経営などといわれますが、そうしたことは、実はアメリカを中心とする海外で1980年代に盛んに喧伝された現象であります。無論、当てはまる点は多いのですが、いわゆる終身雇用、年功序列、企業別労働組合といった三種の神器のように過度にステレオタイプ化された思い込みは捨てなければなりません。一方で、アルバイト経験しかない多くの学生たちにとって、日本の人事労務管理が世界共通であるかのような思い込みもこれまた大きく違っているので、この点でも比較経営という立場から、将来の仕事に向けて学生たちに正しい認識を持ってもらいたいと思っています。そのようなことから、日本における人的資源管理とは何か、その特徴とは、また時代に沿って今後どう変わっていくのか、はたまたその強みとは何なのかを考えてもらうことを意図しています。

一方で、国際比較経営論は、英語を中心とした語学や外国の文化に興味のある学生を対象に、元々戦後のアメリカから渡ってきたマネジメントという概念を、どうせなら大本の英語を使って考えてもらおうという試みです。そう説明すると、予想外の反応が返ってきます。「意外に英語をたくさん使う科目なので驚きました。でも、忘れかけていた英語を使えると嬉しいので、前もってもっと早く資料を配布するようにしてください」という要望が複数寄せられてきました。へえー、この子たちは興味のあることに対しては積極的に予習して授業にやってくるのだと嬉しくなりました。オンライン授業であっても、双方向で速いテンポでやり取りするので(その場での長考禁止)、ほとんど毎回の全員出席が叶えられています。

このクラスにやってくる学生たちは、SAであったりBSAPであったり、何かしらの形で大学からの短期海外留学をした経験のある学生が多いというのもその特徴です。さまざまにご意見はありまじょうが、経営学部がこれまで独自に海外への短期留学を積極的に企画し、実行し、応援してきたことに、その根本があるのではないかと思います。しかも、教員との距離がたいへん近いところで、という事実があります。

このことは、推薦入試を行う際に、受験生が異口同音に「経営学部では海外留学プログラムが充実していて、是非それに応募したいと思い、希望しました」というのが圧倒的に高い割合で語られることから明白です。このことは、とりもなおさず、ことさらに宣伝をしなくても、あの学部は国際的だと受験生の中に刷り込まれているわけで、ちょっと学部のパンフレットの中に書き込むだけで非常に強い磁力を発揮するということでもあります。これはもうブランド価値そのものであると言っても過言ではないわけで、ヘタにいろいろ費用がかかるからなど、型にはまった理由を掲げて棚の上に上げてしまうのは、実は大変もったいないことなのではないかと思います。

ただ、これも現場は大変です。私のような心配症は、学生を送り出したら帰ってくるまで心配でたまりませんし、引率の先生のほぼ24時間態勢のご苦勞も大変です。はたまた、運営本部で大小あらゆる非常事態を一手に引き受ける総元締め先生の苦勞は、本当に肝が据わったしっかりした方でないといけない、と常々感心しています。そうした方々のご苦勞があってはじめて実行に移せる企画であり、これをそれこそ何十年も続けてこられたというのは奇跡としか言いようがありません。どうか、こうした良き伝統、学生のモチベーションに繋がる企画、そして若いうちに異文化に触れるという、またとない機会を与えられるこうした取り組みは、本当の意味

で学部の財産だと思ひます。今後この良き伝統を何らかの形で受け継いでいくことはできないものではないでしょうか。

翻って考えると、こうした企画というのは単に経営学を担当する専門教員だけでは到底できるものではないことがわかります。無論、いわゆる国際の先生方が中心となって行っただきさって来たわけですが、ここに新たな付加価値を加えるには、やはり専門の異なる教員間の協力体制が欠かせません。われらが学部の、多士濟々さまざまな分野の教員がいてこそ実現可能なのであります。確かに専門が違ふと、背景にもっている言語も文化も違ひます。そうした中で、小異に目を瞑り大同で連合するには、それこそ伝家の宝刀、異文化間コミュニケーションの力が必要なのではないでしょうか。お互い少し寛容になって、違ふ点は認め合ひ、大きな方向性では一致するよう、ベクトルの方向は同じ向きでという緩くて強い紐帯があれば、その目的は叶うと思ひますが。

「言うは易く、行ふは難し」。ここで、その昔シドニー大学の学生寮インターナショナルハウスでの経験を少し挟みます。その国際学生寮では、20を超える国と地域からやってきた200人規模の学生がひとつ屋根の下で暮らしていました。その中には、白を黒と言って議論を始めたら、絶対に黒、何でも黒、雪でも黒と言って節を曲げない某・中東国の住人がいました。名物男ではありましたが……。

また、食堂には大きなラウンドテーブルがいくつもあり、そこでは誰でも英語を媒介としてコミュニケーションがとれるようテーブルが配置されていました。それにも拘わらず、広東語オンリーの「香港テーブル」なるものが存在し、広東語を話す住人はギチギチに椅子を詰め、一つのテーブルで広東語で盛り上がりまじります。誰かが英語で話しかけると即座に英語で答えるのですが、その3秒後にはもう

広東語に戻っているという、それほどの結束の強さを見せつけられました。

文化や背景の違いによる同じような事柄は枚挙にいとまがありません。学生には口が裂けても言えませんが、国連のような国際機関で多くの国の人々の橋渡しをするような仕事がしたいなどという安易な考えは、滞在一週間で雲散霧消しました。ただし、身を以て学んだことは、「みんな違って、みんないい」ということ。それが証拠に、一対一で接すると皆フレンドリー。そして、決められたゆるいルールには全員が従います。なにしろ、バスルームもトイレも男女兼用。朝こちらが顔を洗っていると、隣で男の子が上半身裸でヒゲを剃っているなどというのは日常茶飯事。家族のように暮らすというポリシーはこうして保たれていました。

家族のように、とはいっても他人同士、なかなかねえ。残念ながら、われらが経営学部では、みなとみらいに移転する前後から、コロナ禍でのコミュニケーション不足も相俟って、文化の違うメンバー間には何やらわだかまりのようなものが大きく膨らんでしまっているように思います。お互いの違いを認めつつ、その良いところも悪いところも、大きな組織目的のためには小さいことには自分の中で目をつむって調整しようという機運が希薄になっているようにも思われます。こんなにいい仲間なのに、それではあまりにも残念です。今年こそはコロナが収束し、対面授業や対面会議が再び行われて、お互いのコミュニケーションを継続する中で、メンバーそれぞれが自信をもち、共同企画が再発進されることを切に願ってやみません。

これからの「経営学部みなとみらいキャンパス時代」の弥栄を祈念し、この20数年間の教員生活の総括を兼ねて感謝の言葉といたします。ありがとうございました。